

アメリカ社会史研究における新しい視座と展望

貴 堂 嘉 之

1 はじめに

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。ここでは、「学問への招待」状として、私の研究対象である歴史学・アメリカ研究について、読書案内をかねつつ紹介してみたいと思います。

みなさんの中には、高校で教わった地歴の授業で、歴史を学ぶことの面白さに目覚めた人もいるだろうし、逆に暗記中心の歴史の授業に辟易していた人もいるかもしれません。「歴史学とは何か」という問いにここで真面目に答える気はありませんが、E.H. カークが「過去と現在との対話」といい、W. ベンヤミンが「いまを積み込んだ過去」というキーワードを提示しているように、時間軸に沿って思考するこの歴史学という学問の場は、「過去」が「いま」を積み込み、また「いま」が「過去」を積み込む、重層的な現在をたえず問い続けるものである、と私自身は考えています。

21世紀に入って間もないのに、私たちの眼前には、この「過去」と「いま」が積み重なり、解決の糸口すら見つからない歴史の現場が、日々、展開しています。この文章を書いている一月初めの時点では、アメリカ・イラクの緊張関係は高まりつつあるものの、まだ開戦にはいたっていません。ですが、もしかしたらこの特集号が刊行される4月には、すでに戦争は始まっているかもしれません。そもそも、このブッシュ政権の対イラク強硬路線へと連なる政策の淵源に、2001年9月11日の同時多発テロがあることは言うまでもありません。ニューヨークの象徴であり、世界中の企業が入ったいわばグローバル資本主義のシンボルでもあった

世界貿易センター（WTC）の二つのビルが、ハイジャックされた飛行機の自爆テロにより崩れ去り、国防の中枢であるペンタゴンまでもが破壊されるさまは、あたかもハリウッドの最新のCG技術を使った大作映画の映像のようでした。米国のメディアは、ただちにイスラム原理主義過激派によるテロの疑いが強いことを報道し始め、同時に、ニュースキャスターは「真珠湾攻撃の再来」と繰り返し伝えました。つまり、テロという「いま」が、CNNで繰り返し流された、歓喜するパレスチナ人女性の姿を通じ、イスラエルのリクード党シャロン党首のもとでのパレスチナ人の第二次インティファダへの激しい弾圧やイスラム世界の民衆の絶望と怨嗟とに結び付けられ、イスラム世界対アメリカ・（イスラエル）という二項対立的な構図が示されると同時に、また一方では、アメリカにとっては唯一の直接攻撃の体験である日本軍による真珠湾攻撃の戦争の記憶が呼び起こされ、対テロにむけてのアメリカ市民の団結、愛国主義が喚起されることになったのです。

日本のメディアは、瓦礫と化したWTCのそばで、深い悲しみに打ちひしがれたニューヨーカーの姿を連日映し出し、星条旗を掲げるアメリカ社会の一枚岩的な団結を強調しました。たしかに、1960年代のヴェトナム反戦運動を指導し、当時の学生運動の中心メンバーとして活躍していた左翼知識人までもが、今回のテロを契機に愛国主義的な立場から反テロリズムへの支持を表明するに至ったのはそうした状況を象徴しているともいえるし、しかし逆に言うと、そうした人々によって担われていたアメリカ社会への批判的想像力が、愛国主義の罨に落ちて枯渇してしまっている状況に私はたいへんな危機感を覚えます。メディアが伝える戦争に関しては、『現代思想』「特集 戦争とメディア」（青土社、2002年7月号）のキャロル・グラック論文「9月11日—21世紀のテレビと戦争」や、サイドの『戦争とプロパガンダ』（みすず書房、2002年）をお読みいただき、みなさんの「いま」がいかに恣意的な情報操作により支配されているのか、決して一枚岩ではないアメリカの反戦の声にも耳を傾けてもらいたいものです。

その点で、私は反テロ戦争下のアメリカで反戦運動のシンボルとなったバークレーという西海岸の都市に注目しています。というのも、ちょうど2000年夏から

一年間の研究の機会を与えられて、私はテロの二週間前までバークレーで家族とともに過ごしていました。私が研究対象の一つにしているアジア系アメリカ人関連の史料の宝庫であるこのベイ・エリアで、研究三昧の毎日を送れたことは研究の大きな糧となりましたし、6歳で渡米した息子も現地の学校に通い、片言の英語でコミュニケーションをとれるようになり、肌の色の違う親友を作れたことは、多文化社会アメリカの寛容さ、奥深さを実感させるものでした。また、年末には、ブッシュとアル・ゴアが大接戦を演じた大統領選があり、いまや民主党支持者の牙城となったカリフォルニアで、最後までゴアの奇跡の逆転勝利を願ってやまないたくさんの熱狂的な民主党員を観察できたことは、アメリカの草の根の政治活動を知るまたとない機会となりました。その後、ブッシュ大統領を中傷するステッカーを貼った車を西海岸のフリーウェイでよく見かけていた私には当然のように思えますが、みなさんは、連邦議会では対テロ戦争への圧倒的な支持が共和党・民主党の区別なく表明されるなかで、ただ一人反対票を投じたバーバラ・リー議員の地元がバークレーであり、バークレー市議会がそれに先んじて戦争反対決議を行っていたことをご存知でしょうか。

バークレーは60年代のアメリカの学生運動、マイノリティの異議申し立て運動の一大拠点でありました。そのラディカルな反権力の哲学が生きているのでしよう。ブッシュ大統領は、WTCへのテロを「私たちの自由が攻撃された」と述べました。「自由」というシンボリックなレトリックに、全米の人びとが愛国の情を表明するなか、一方ではイスラム教徒への嫌がらせ・暴力、ときには風貌の似たシーク教徒が被害にあう民族・宗教差別が頻発するようになります。そうした差別行為に対して、一番大きな抵抗の声を上げたのは、第二次世界大戦中に強制収容の体験を持つカリフォルニアの日系人コミュニティであった点は特筆すべきでしょう。ロサンゼルスにある全米日系人博物館のアケミ・キクムラは、アメリカのイスラム教徒を守るのは日系人の責務だと主張しています。普遍的な装いをもった「自由」という理念が、実質的にさまざまな制約をもち、歴史的にいかん作られてきた概念であったのか。かつてのアジア系人への差別を克服し、多文化共生社会を実現したカリフォルニアの人々は、「自由」を守ることが、ときに

排他的な暴力を惹起することを知っています。近代の啓蒙時代にできた政治的公共性を読み直す上でも、この「自由」に関する洞察は歴史学の重要なテーマですが、アメリカの「自由」の歴史に関しては、歴史家エリック・フォナーの *The Story of American Freedom* (1998) が最も優れた概説です。翻訳がないので英語で読むしかありませんが、大学生になったのですから、こうした原書にチャレンジしてみるのも悪くないでしょう。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、とにかく歴史学は、みなさんの「いま」を作り上げている自明のもの、普遍的だと思っている常識を、疑ってみることから始まります。アメリカ人の愛国主義について少々お話ししてきましたが、自分たちの身近にも同じ類の「公共性」が立ち上げられようとしていることに注意する必要があるでしょう。最近示された教育基本法の改正素案では、「愛国心」の養成が教育の柱に掲げられようとしています。私たちが国を愛するということがどういうことなのか、この点に関しては、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（NTT出版、1997年）をお勧めします。過去二世紀にわたり、なぜ数千万、数百万の人びとが殺し合い、祖国のために死んでいったのかを問うアンダーソンは、その原因を「国民」を想像する、その想像力の途方ない暴力性の問題として論じます。「水平的な深い同志愛として心に思い描かれる」まさにその同胞愛が、現代社会の暴力の引き金になってきたのであると。また、マーサ・C.ヌスバウム編の『国を愛するということ—愛国主義の限界をめぐる論争』（人文書院、2000年）は、教育の現場で子どもたちに「愛国」「忠誠」をどう教えるのか、アメリカを舞台にした議論が収められているので、あわせて読まれることをお勧めします。

歴史学を学ぶ者は、まさにこの暴力的な想像力の対極にある批判的想像力を養わなければなりません。この点に関しては、オーストラリアから日本の近代史、マイノリティ問題に積極的な発言をしているテッサ・モリス＝スズキの『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』（平凡社、2002年）が参考になるでしょう。冷戦後の世界において、政治・経済・軍事の各分野で圧倒的なヘゲモニーを握ってしまったアメリカが、今日のように国際協調路線から距離をとり、

単独行動主義的なスタイルをとり続ける限り、私たち歴史家はこのアメリカという「いま」に正面から向き合わなければなりません。

2 日本におけるアメリカ史研究と一橋大学のアメリカ史

では、次に日本のアカデミズムのなかでアメリカ合衆国に関する研究がどのようにして出来上がってきたのか、また、アメリカ史研究において一橋大学の歴史家たちがいったいどのような役割を果たしてきたのかに話を移しましょう。

(1) 「アメリカ研究」とは何か？

日本の戦後歴史学が、第二次世界大戦の敗戦を母斑としてある性格付けをされてきたことはしばしば指摘されることですが、「アメリカとは何か」を問うアメリカ研究は、GHQ占領期の日本で産声をあげたわけではありません。戦前から、いや実際には、幕末・明治維新时期の日本にまでその起源をさかのぼることができます。福沢諭吉が独立宣言を翻訳して、共和制・民主制のモデルとして紹介したことはよく知られていますが、いまでも古典として読み継がれているアレクシス・ド・トクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』もまた明治14、15年には早くも翻訳され、ヨーロッパの貴族社会、階級社会と対比される平等社会、民主主義の国としてアメリカが、日本に紹介されました。デモクラシーを体現する国としてのアメリカは、新渡戸稲造らによって大正デモクラシー期にも盛んに紹介され、日本に入ってくるアメリカの大衆文化の影響とともに徐々にアメリカに関する情報が蓄積されていきました。

この間のアメリカ研究の史学史的な発展の経緯は、すでに斎藤眞さんによる優れた整理があるので、詳細はそちらに譲りたいと思います。ただ、当初からアメリカは、ペリー来航以来、日本にとっては特別の二国間関係として、またヨーロッパとは対比される政治理念を体現する近代普遍文明として語られる対象であったことは、あらためて確認しておく必要があるでしょう。さらに、もうひとつ忘れてはならないのは、日本にとってアメリカは明治元年にハワイへ「元年者」といわれる人々が最初に海をわたって以来、移民問題を通じて特別の関係を

結ぶようになった点に注意する必要があります。

日本人移民は、1890年代から本格的にアメリカ西部へと流入を始めますが、ちょうどこの世紀転換期は、アメリカが米西戦争を契機に、ハワイ・グアム・フィリピンに拠点を持つにいたり、日本もまた日露戦争を戦い、互いに環太平洋世界の強国として対峙するようになります。アジアから最初にアメリカへと渡った中国人移民はすでに1882年の移民法で、流入停止の措置を受け、差別的な扱いを受けていましたが、日本人移民もまたサンフランシスコ大地震の時に白人学校での共学を禁じられ、東洋人学校への隔離を市当局に命じられるという、いわゆる学童隔離事件が起こり、その移民問題はただちに日米の外交問題に発展してきます。セオドア・ローズベルト大統領が介入し、1906—1907年に日米紳士協定が結ばれ、日本側が労働移民の渡米を自主規制することで事態の収拾がはかられますが、その後もカリフォルニアでは排日運動は激しさを増し、排日土地法が制定され、また写真花嫁問題では深刻な文化摩擦が起こり、最終的に1924年には、日本人移民の全面禁止へと推移していきます。

この1924年移民法の排日条項は、新渡戸稲造や内村鑑三のような親米派の人々を憤慨させ、日本でも「国辱」として新聞に報じられています。昭和天皇は、のちにこのことを「大東亜戦争の遠因」として、「この原因を尋ねれば、遠く第一次世界大戦後の平和条約の内容に伏在している。日本の主張した人種平等案は列国の容認する処とはならず、黄白の差別感は依然残存し加州（カリフォルニア州）移民拒否の如きは日本国民を憤慨させるに充分なものである。…かかる国民的憤慨を背景として一度、軍が立ち上がった時に、之を抑えることは容易な業ではない」と述べています。アメリカ研究自体も、満州事変以降、日米関係が緊張するなか大きく変化し、普遍文明国アメリカのイメージは消え、「敵国」研究へと完全にシフトしていきます。

日米戦争については、それが人種戦争としての側面を有していたことを巧みに描き出した、ジョン・ダワーの『容赦なき戦争』（平凡社、2001年）が、きっとみなさんの大戦観を大きく塗り替えることでしょう。高校の世界史レベルで取り上げられるワシントン体制下の制度的・条約的な枠組みや経済的利権の問題とは

別に、この日米関係には人種や移民といった補助線を引くことによってまったく新しい地平が見えてきます。ここでは、これ以上踏み込みませんが、最近、このような視点を強調して、『アメリカの歴史』(有斐閣、2002年)という概説書を共著で出しましたので、詳しくはそちらをご参照ください。

大戦が終結すると、一転、敵国研究から脱却し、いま一度「アメリカとは何か」を問うことで、戦後、新たなアメリカ研究が登場してくるようになります。進駐軍の介入をゆるさず、学問的自由を確保して、1947年にはアメリカ学会が設立されます。現在では、1000人を越える会員を有する学会も、当初は高木八尺、松本重治ら会員数わずか20名ほどでの船出であったそうです。しかし、東西冷戦が勃発し、サンフランシスコ講和により日米関係が緊密化するようになると、アメリカ研究は飛躍的にその緊急性、必要性をまし、政治外交史のみならず、思想史、文学史、文化史などあらゆる領域に研究は広がりを見せるようになります。

おりしもこの時期、アメリカではコンセンサス史学と呼ばれる研究が出てきました。米ソ冷戦期の思考枠に囚われていたこの学派の場合には、一つの大前提となるアメリカ像がありました。それは、アメリカには人種や階級の境界を越えて支持されうるヨーロッパ由来の自由主義・民主主義の伝統が存在し、それらを紐帯として統合された予定調和的な世界がそこにはあるというのであります。したがって、WASP(アメリカのエリートを指す言葉で、White, Anglo Saxon, Protestantの頭文字をとったもの)中心のアメリカの伝統に移民がどのように同化するのか、アメリカ社会の社会的流動性に関する経済分析によって「アメリカの夢」の实在を証明する研究が数多く書かれることになりました。このなかには、今日でも、アメリカ研究では必読のものがいくつかあります。一つだけ紹介しておく、例えばルイス・ハーツの『アメリカ自由主義の伝統』(講談社学術文庫、1994年)は、アメリカ社会が、ヨーロッパとは異なり封建制が歴史的段階として欠如しているがために、自由主義が対抗原理なしにアメリカでは受容され、唯一の基本的信条としてうまく機能するようになった、と説明します。こうしたアメリカの例外主義的な立場を強調する研究をもとに、日本でもアメリカ文明論の枠組みが形作られて、それが戦後第一世代の研究スタイルとして確立していきまし

た。

しかし、1960年代になるとこの歴史観は根底から大きく揺さぶられることとなります。黒人たちの公民権運動、それに呼応して沸き起こったアジア系、先住民、あるいは女性団体など各マイノリティ集団が異議申し立て運動を展開し、またヴェトナム反戦運動とも連動して、アメリカ合衆国内部の社会・思想の分裂状況が顕在化して、それまでの歴史家が暗黙の前提としてきた単一の「統合的なアメリカ」像が音を立てて崩れ落ちていきました。歴史家は、少数民族や女性など社会の周縁に位置づけられてきた「物言わぬ」人びとの歴史の注目し、彼らの生き方のなかに有用な「異文化」を発見することに努めました。こうした従来の政治史・外交史中心の歴史から、マイノリティ史への大きなパラダイム・シフトがアメリカ歴史学で起きたのです。これを、アメリカでは「底辺からの歴史学」とか「新しい社会史」と呼びます。

この社会史研究の視座は、すぐに日本の歴史家たちにも影響を与えました。日本において、本格的な黒人研究、日系アメリカ人研究、またニューレフト史学の流れをくむ「帝国としてのアメリカ」に着目する外交史研究が登場するのは、ちょうどこの時期です。また、いまのアメリカ史研究会の前身であるアメリカ史研究者の若手グループが集まって、合宿形式の勉強会を行うようになるのもこの時期です。こうした新しいアメリカ史像探求の試みは、例えば清水知久・高橋章・富田虎男編『アメリカ史研究入門』（山川出版社、1974年）のようなかたちで結実し、新たな問題提起をします。この本のはしがきには、「著者たちは、アメリカ史を帝国の歴史として捉え、差別の全体系としての帝国に反対するという立場で一致している。…著者たちは帝国・帝国主義に反対し、その打倒に向けての日米民衆の協力強化を望んでいることを明言し、かつ本書がその希望の実現にいささかでも役立つことを願っている」とあります。

（2）一橋大学でアメリカ史を学ぶということ

これから本学で学ぶみなさんは、アメリカ社会史研究において一橋大学の研究者がその社会的な視座を定着させる上で、きわめて大きな貢献をなしてきたこ

とを知っておく必要があるでしょう。さきほどお話した社会史研究の登場とともに新しく生まれてきたアメリカ史研究会という組織の事務局も、実は一橋大学にあります。私自身も運営に携わっていますが、アメリカの「いま」をたえず問い続け、ラディカルな問題意識を持つ団体としていまも活発な研究活動を行っています。また、そもそも大学組織としても、名前に社会史をうたった講座をもつ大学も稀でしょうが、本学にはヨーロッパ史の阿部謹也さんや良知力さんなど、日本の社会史研究を牽引してきた歴史家がおりました。私自身も学生の頃、大いに啓発されたものです。

こうした社会史研究はアナル学派の影響を受けたヨーロッパ史に限られたことではなく、アメリカ史においても伝統があります。まず名前を挙げなければならないのは、日本における黒人史研究の第一人者、本田創造さん(1924—2001)です。『アメリカ黒人の歴史』(岩波新書)は、アメリカ史必読の書です。本田氏が編者になって刊行された共同研究の成果『アメリカ社会史の世界』(三省堂, 1989)は、日本のアメリカ社会史研究のひとつの到達点として高く評価されています。ハーバート・ガットマンの『金ぴか時代のアメリカ』やハワード・ジンの『民衆のアメリカ』、ロナルド・タカキの『パウ・ハナ: ハワイ移民の社会史』といったすぐれた訳業はそれまでにもありましたが、日本でこれだけの濃密な社会史の世界を描くことが可能になったのには、本田さんの功績が大きかったのだと思います。本田さんは、最初、経済研究所に入れ、いったん神戸大で教えられたあと、また社会学部に戻られて1988年まで教鞭をとられました。本田さんのもとに集まった若い研究者には、私の同僚の中野聡さんも含まれますが、現在、日本で活躍されている黒人研究者のほとんどは本田ゼミになんらかのかたちで関わった人たちであり、教育者としていかに優れていたのかがわかります。一昨年亡くなられてから『毅然として』という追悼集がだされましたが、そのなかに本田さんの海軍時代の逸話が紹介されています。旧制高校のときに海軍予備学生になり、特攻隊への志願を上官に求められたとき、他の学生たちが上官の圧力に負けて「衷心熱望」「望」と返事するなか、本田さんは、形だけの「選択制」を導入したやり方を「偽善」と感じて、「不望」と答え、上官・同輩から死を覚悟す

るほどのリンチを受けた、というものです。正義とは何か、差別とは何か。鋭敏な感性をもって、歴史家として本田さんが取り組む姿勢、信念がどのようにして育まれたのが、追悼集によせられたエッセイの数々により語られています。

この後任として一橋大に赴任してきたのが、辻内鏡人さんです。専門は、19世紀アメリカ社会の奴隷解放に関する思想史的考察と、南北戦争・再建期の解放民局の活動に関する実証的な歴史学的考察を柱とし、近年は、ポストコロニアル批評の問題意識を受け止めつつ、アメリカの国民統合や人種論、多文化主義に関する思想史的考察へと研究領域を広げていきました。代表的な著作である『アメリカの奴隷制と自由主義』（東京大学出版会）や、『現代アメリカの政治文化——多文化主義とポストコロニアルの交錯』（ミネルヴァ書房）は、新入生のみなさんには少々難解に感じられるかもしれませんが、日本のアメリカ史研究の最前線の研究ですので、ぜひ手にとってもらいたいものです。

私自身が、本学に移ってきたのは去年の4月で、それまでの7年間は千葉大学の文学部・史学科でアメリカ史を教えていました。そこは、美術史・考古学をもふくめ17名もの研究者を集めたやはりユニークな史学科で、私自身はここで歴史家として育てられたともいえるし、後で述べるような政治風刺画を使った表象研究に着手するようになったのも、若桑みどりさんら美術史家との出会いがあったからだと思っています。また、教科書問題など政治的な問題にも常に迅速に対応し、大きなシンポジウムを開催したこともあり、保守系の雑誌では名指しで入試問題を批判されたり、学科には脅迫まがいの投書がよく送られてきていました。そんななかでも記憶に残っているのは、石原都知事が「三国人発言」をして物議をかもしたときに行われた公開シンポジウム「歴史の中の差別——「三国人」問題に寄せて」であります。この内容は、日本経済評論社から同タイトルで刊行されていますが、そこに拙文「人種とは何か——アメリカのなかの「アジア」から考える」が収録されているので、是非お読みいただきたいと思います。そんな一橋出身の有名人を批判していた私が、どうして本大学に移ることになったのか、これには、ある悲しい事件について語らなければなりません。

それは、まだアメリカで在外研究中の出来事でした。日本の友人から、事件の

あったその日のうちにメールで、辻内さんが交通事故にあい、亡くなったとの第一報が入りました。国立駅の北口側の路上で、自転車にのっていた辻内さんが、故意に軽トラックにはねられ、亡くなったということでした。これからさらなる活躍が期待される、まだ46歳の若い研究者が突然、人生にピリオドを打ったことを、私は私自身に納得のいくように説明することができませんでした。一年間の在外研究がおわって日本に帰ったあと、私は辻内さんと一緒にいくつかの共同研究プロジェクトに参加することになっていました。東京大学の油井大三郎さんを中心に企画された「アメリカンゼーションの国際比較研究」、京都大学の人文科学研究所のみなさんが中心に企画された「「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」、黒人研究者の樋口映美さんを中心に企画された「アメリカにおける国民意識の歴史的考察」など、論客であった辻内さんがどのような発言をされ、その成果としてどのような共同研究ができるのか、楽しみにしていただけに残念で仕方ありません。辻内さんの後任として着任した私としては、この社会史研究の先輩たちが問いつけたアメリカ探求の道を突き進む以外に、とるべき道はありません。

3 研究紹介

では、最後に私のいま取り組んでいる研究を紹介して、筆をおくことにしたいと思います。

(1) 人の移動史

私の研究のひとつの特徴は、近代世界においてつねに人の移動の中心であったアメリカを、その人の移動史という観点から捉えようとする点にあります。従来、人の移動のなかでも、「移民」という自発的な自由意志に基づいて渡航する人びとを中心に「移民史」という分野の研究が蓄積されてきたのですが、私の場合は、黒人奴隷のような強制移動のケースや、中国人や初期の日本人移民のような一定期間、強制労働に従事する約束をして海を渡ってくる契約労働者のケースなど、多種多様な移動民の歴史を総合し、彼らがアメリカというネーションに統合され

ていく歴史的過程に関心があります。

私は、アメリカの国民統合において、この特権的な「移民」の位置づけを再考することが緊要な課題であると考えています。すべてが外国人である移民を「国民」にするためには、「帰化 naturalization」という法手続きが必要であり、その上で、彼らは市民権取得のための申請手続きをして、アメリカ人となります。それは、クレブクールが『アメリカ農夫の手紙』で、「ヨーロッパの貧しい人びとがなんらかの方法でこの偉大なアメリカという避難所で、一緒になりました。…では、この新しい人間、アメリカ人というのは何者なのでしょう。その人は、ヨーロッパ人か、ヨーロッパ人の子孫であり、それゆえにほかのどの国にも見られない、あの奇妙な混血なのです。…このアメリカでは、あらゆる国籍を持った個人が融合して、一つの新しい人種となっているのです。」と書いていますが、まさにこのような予定調和の「国民」創造のプロセスが、アメリカ史のマスター・ナラティブになってきたからです。

移民史に入れてもらうことすらできなかったアジア系移民の歴史をどう考えるのか。「自由の国」アメリカで、不自由を強いられた奴隷の存在をどのように考えるのか。人種差別は、なぜ起きるのか。こうした疑問に、一つ一つ答えていく作業がいまも続いています。同じ肌の色をし、均質性の高い社会にすむ日本人には、アメリカの多様性、多人種・多民族国家の国民統合を理解することは、難しいことかもしれません。アメリカの通貨に E Pluribus Unum という「多様の中の統一」という意味のラテン語が刻まれているように、多様な人びとを統合することがアメリカの一貫した政治課題であったのです。みなさんは、大学4年間のあいだに、アメリカを旅行して見聞する機会もあるでしょう。そのときは、ニューヨーク・マンハッタンの近くにあるエリス島の移民博物館を訪れてみるといいでしょう。自由の女神のツアーとセットになったコースは、日本人観光客の定番ではありますが、この博物館ほど、移民国家アメリカの豊かさ、厳しさを実感できる空間はありません。コロンビア大学の大学院に通っていた頃、移民の審査過程において優生学的な科学がどのような役割を果たしたのかに関心があり、私もよく通いました。

ヨーロッパからの入り口がエリス島だとすると、アジアからの移民の上陸地点は、サンフランシスコ湾沖にあるエンジェル島です。ここにも、規模は小さいのですが、日本人移民や中国人移民が入国審査を受けた建物の一部が保存され、博物館となっています。特に興味を引かれるのは、移民帰化局より長期の拘留を余儀なくされた中国人渡米者が、壁に書き記したたくさんのポエムです。沈黙を余儀なくされてきたマイノリティの生の声をよみがえらせるのが社会史研究のひとつの重要なテーマであるわけですが、この詩をすべて収録した詩集が、Him Mark Lai, Genny Lim, and Judy Yung, *Island: Poetry and History of Chinese Immigrants on Angel Island, 1910-1940* (1980) として刊行されていますので、移民たちの生の声に関心がある方は参考にしてください。

(2) 南北戦争・再建期の国民統合と人種主義

上記のような人の移動史への関心の延長線上で、より細かな研究対象としているのは、アメリカに渡った中国人移民に対する排斥運動であります。この問題は、アジア系移民研究のなかでは、都市の労働者階級による人種差別主義に原因を還元して議論されてきました。ですが、私が問題の枠組みとして設定しているのは、南北戦争・再建期というアメリカのナショナリズム、国民統合の歴史的過程において画期となるこの時期において、従来、奴隷解放宣言により国民化していく黒人たちに焦点が当てられてきたわけですが、私たちアジアからの移民はこの歴史的過程でいかなる役割を果たしていたのか、この国民統合のプロセスと中国人移民の排斥運動が、「国民」の境界を策定していく一連の運動した政治的力学分析から、説明可能なのではないかと、という問題意識から研究は始まりました。

60万人以上の死者をだした未曾有の内戦であった南北戦争は、アメリカ史の重要な分水嶺です。近年の研究では、この戦争により連邦政府が大きな権限を持つようになり、市民の間にも愛国の情が芽生え、国民意識が生まれてくるようになったと、制度面からも国民意識の面からも国民国家としての淵源としてこの時期に注目が集まっています。

ただ、奴隷制廃止運動、アイルランド系などの都市の移民労働者の状況、南部

(挿絵 1) Pacific Chivalry (*Harper's Weekly*, August 7, 1869)

と北部の地域差など、複雑な時代状況を理解することはなかなか難しいかもしれませんが、最近、話題になった映画にマーティン・スコセッシ監督の『ギャング・オブ・ニューヨーク』という映画があります。舞台は、ニューヨーク・マンハッタンのダウントウン、ファイブポイントという地区。貧しいアイリッシュが住居を求め、酒場、売春宿の密集する混沌の街で、「ネイティブ・アメリカンズ」というアメリカ生まれの組織が自らの土地の社会秩序を守るべく、アイルランド移民たちのギャングをよそ者として排除しようとして抗争を繰り広げるという筋立てなのですが、時代はまさに南北戦争の真只中であり、ちょうどそのときにニューヨークでは徴兵暴動（New York Draft Riot）が起こります。これは、連邦軍への徴兵制度が作られるものの、富裕層には抜け道があり、貧困層にのみ重圧がかかってくる状況下で、しかも共和党政権が戦争目的を当初の連邦救済から、黒人奴隷制の廃止という社会革命を目指すものへと大転換したこともあり、戦前は黒人と同列視されていたアイリッシュらが黒人解放のために兵士として戦うことを拒否し、黒人の孤児院を襲撃するなどして凄惨なリンチを加え、大規模な暴動を起こします。まさに、新しい国家が誕生しようとする混沌のなかで、マ

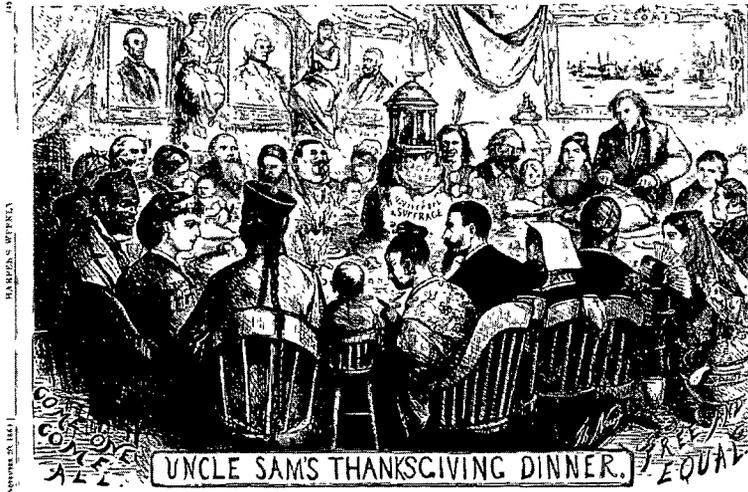
イノリティ同士が生き残りをかけて戦う姿が描かれています。ダニエル・デイ＝
ルイスの圧巻の演技だけでも一見の価値がありますので、お勧めします。

さきほど、「国民」を想像する暴力性について言及しました。近代は、ある意味では国民主体である「われわれ」を立ち上げていく時代であり、その「われわれ」の境界の外側に布置される他者の形成過程こそが、近代のさまざまな差別問題を解明する鍵であると、私は考えています。この南北戦争は、アメリカ人という「われわれ」を表象する上で不可欠の時代状況であったために、いままでにもさまざまな映画が主題として取り上げてきました。南北戦争終結50周年の1915年に封切られたグリフィス監督の『国民の創生』も、そのひとつです。映画史上に燦然と輝くこのクラシック・フィルムは、リンカーン政権の奴隷解放のそれまでの歴史的な意義づけをひっくり返し、トラブルメーカーとして醜い黒人を描き、救済者として白人のKKKを登場させ、戦争をあたかも白人同士の兄弟喧嘩のように捉えなおしました。それ以外にも、『風と共に去りぬ』、『グローリー』など話題作だけでも、説明しだしたらきりがありません。それぞれにフィルムの生まれた時代背景を反映しつつ、異なる歴史観が描かれているので、比較しながらご覧になると面白いでしょう。

しかしスコセッシの映画を私が評価するのは、監督がニューヨークのアンテベラム期の社会史を熟知しているからです。映画の中で、黒人とアイルランドの舞踏文化が融合して、タップダンスが生まれたことや、中国人の経営するレストランでの交流など、アイリッシュ・黒人・中国人の当時の雑種文化がたくみに描きこまれています。私が読み解こうとしている差別の複合構造も、こうした社会的な雑種性、そこから純化をもとめて自らの文化アイデンティティを立ち上げていこうとする動きなど、すべてを総合して全体像を把握しなければ、とうてい理解することはできません。

いままで、個別に研究が蓄積されてきた黒人史やアジア系移民史、アイルランド移民史などを、同時代性のなかでつないでいく作業が私の現在の課題です。「国民」の境界を設定する際に、マイノリティがそこへの参入を求めて、自分より劣位のマイノリティを差別していく構造、これを「差別内差別」と私は呼んで

(挿絵 2) Uncle Sam's Thanksgiving Dinner (*Harper's Weekly*, November 20, 1869)



いますが、そうした国民化と差別の連鎖を分析しながら、新しい社会史研究の地平を模索しています。

さきほども少し触れましたが、文字を残さないマイノリティの生きられた世界を扱う社会史研究は、史料面で大きな制約を受けているわけですが、そうした点を克服するために、私は19世紀のアメリカに登場してくる新聞・雑誌に掲載された政治諷刺画を史料として利用し、表象研究を歴史学に取り入れる試みを始めています。アンダーソンも指摘しているように、近代の出版資本主義は、ナショナリズムの形成にきわめて大きな影響を与えました。遠方の見ず知らずの他人が、同じ情報をシェアできるようになり、国民としての一体感を持てるようになったからです。

アメリカでは、南北戦争の直前にイラスト入りの週刊新聞が刊行されるようになりますが、私はそのなかでも共和党系のメディアである『ハーパーズ・ウィークリー』という雑誌に注目して、そこで活躍した19世紀のアメリカを代表する諷

刺画家であるトマス・ナスト(Thomas Nast: 1840-1902)を研究対象としています。というのも挿絵2に象徴的に示されるように、ナストは共和党急進派の人種平等の理念に基づく国民統合の理想図を数多く描き、大統領選のキャンペーンにも積極的に介入するきわめて政治的な画家だったからであり、そうした画家の描く他者としてのアイルランド系移民や民主党議員、当時の人種科学や進化論の影響など、図像にはさまざまな読み解くべき記号が隠されているからです。

歴史学で図像を読むといった方法があるのかなかなかイメージのわからないものもあるでしょう。そういう方には、たとえば、私と村田雄二郎さんとで翻訳した『カミングマン——19世紀アメリカの政治諷刺漫画のなかの中国人』(平凡社, 1997年)をご覧ください、一枚一枚の図像を吟味して、その解説文をご参照いただければと思います。

おわりに

以上、限られた紙幅ですので十分な紹介をすることはできませんが、アメリカ社会史研究がどういうもので、私自身がどんな課題に取り組んできたのかを説明してきました。あわせて、推薦できる研究書を書き込んでおいたので、新入生のみなさんがこれらの本を手にとって下さることを期待しております。

参考文献(本文中に著者名・タイトル・出版社を書き込んだものは除く)

E.Hカー『歴史とは何か』岩波新書, 1962年。

W.ベンヤミン『ボードレール 他五篇』岩波文庫, 1994年。

斎藤眞「日本のアメリカ研究前史——日米関係の狭間で」阿部齊・五十嵐武士編『アメリカ研究入門』東京大学出版会, 1998年。

貴堂嘉之「19世紀後半期の米国における排華運動——広東とサンフランシスコの地方世界——」(東京大学地域文化研究会『地域文化研究』第4号, 1992年)

——「「帰化不能外人」の創造——1882年排華移民法制定過程——」(『アメリカ研究』第29号, 1995年)

——「中国人移民のイメージの相克——トマス・ナストの風刺画の世界——」(日本移民学会『移民研究年報』第3号1997年)

——「ギルディッド・エイジにおける階級統合のかたち——労働騎士団の結社の文

化と中国人問題——」(『アメリカ史研究』第21号, 1998年)

——「南北戦争・再建期の記憶とアメリカ・ナショナリズム研究——トマス・ナスト政治諷刺画リスト(1)1859~1870——」(千葉大学『人文研究』第29号2000年)

——「〈アメリカ人〉の境界の帝國的再編——世紀転換期の中国人移民政策の変容: 1882~1906——」(『アメリカン・スタディーズ』第5号2000年)

山田賢・三宅明正編『歴史の中の差別——「三国人」問題とは何か』日本経済評論社, 2001年.

(一橋大学大学院社会学研究科助教授)